

駿河湾の貝類相

波部忠重 (東海大・海洋)

Molluscan fauna of Suruga Bay

TADASHIGE HABE

駿河湾は急深な湾で水深1,000 mの等深線が湾内深く入りこみ、深海性の動物が岸近くで採集される特色ある湾として知られる。この湾の貝類については大山(1942)が駿河湾産軟体動物目録に661種を記録している。その後全般的にまとめられた目録はないので、1980年以来、筆者はこの湾の貝類相の調査をすすめ、1982年10月末現在1,114種を記録することができ、1983年3月その目録を発表する予定である。

駿河湾の貝類は種類数個体数とも伊豆半島寄りの湾東部、特に松崎沖と石花海(セノウミ)および内浦湾に多く、湾西部や湾奥部に少ない、また湾央の深底にも少ない。浅底に多いミジンシラオガイやアデヤカヒメカノコアサリ等は石花海や伊豆西岸にそって分布するが、湾奥の内浦湾や清水港附近に多く、ワタゾコエガイやナミジワシラスナガイ等はその分布が一層伊豆西岸から内浦湾と石花海に片寄っている。ソウヨウハトムギソデガイは湾央の深底にそって湾奥に及んでいる。

また、シジミナリクルミガイ・オネダカソデガイ・ソウヨウハトムギソデガイ等は従来の1,000m以浅の記録に対して水深2,000mを超えた。

さらに二枚貝類の中、クルミガイ目の種類の占める割合は水深を増すほど高くなる。水深36~185 mの13地点では0.5~27.0%であるのに対し、水深515~2,050mの12地点では28.4~100%、1,000m以深の地点では65.5~100%である。浅所ではマルスタレガイ目の唇弁が小さく、鰓がよく発達して、それで餌をとる種類、深底ではクルミガイ目の唇弁がよく発達してそれで泥上の餌をとる種類が多いのは懸濁デトライタスが浅所で多く、深底で少ないためである。

Filipodium ozakii の表面構造と分類学的位置

星出一巳 (山口大・教育・生物)

Surface structure and systematic position of *Filipodium ozakii*

KAZUMI HOSHIIDE

Filipodium ozakii は福井により広島県産のスジホシムシモドキ (*Siphonosoma cumanense*) から報告された。このグレガリナは分類学的に興味ある点がいくつかある。この原虫は当初有頭類グレガリナ Dactylophoridae の科に分類されていたが、その後 Grassé により無頭類グレガリナの Lecudinidae 科に移された。この属は体に明瞭なセプタムを有せず、1室性であることから、無頭類として分類することは妥当だと考えられるが、Lecudinidae 科に属させることには問題がある。Lecudinidae 科は Kamm により創設されたが、科を規定する標徴が厳密でなかったため、多くの属がこの科に移され、混乱を来している。Kudo の分類では6属だったが、その後増加し、Levine の分類では25属となっている。宿主動物は環形動物多毛類、ユムシ類、星口動物、節足動物甲殻類、昆虫類と無脊椎動物の広い範囲にわたり、スポラジンの形態も属により変化が大きい。恐らくこの科はいくつかの異なった系統をもつ動物群の寄せ集めで、分類学的に再検討を要するグループである。中でも *Filipodium* 属の形態的特徴は Lecudinidae 科として分類するのは不適當であり、別の科として独立させた方がよいと考えられる。現在まで観察された真グレガリナ類の多くのは、体表面に体軸に沿って縦に走るひだ状構造が見られたが、この原虫にはそのようなひだ状構造は全くなく、かわりに繊毛状突起構造がある。ムクロンは複雑で漏斗状をしており、その前縁には乳頭状の突起が見られる。